

茶の湯文化学会会報 No.31

第31号 / 2001年12月24日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL. 075-702-9270
発行 茶の湯文化学会 -0805 生産開発科学研究所内 FAX. 075-702-9314
http://www2.ocn.ne.jp/~chanoyu/ e-mail chanoyu@oregano.ocn.ne.jp

「緑」と「紅白」―『茶経』における文字の異同について

高橋 忠彦

『茶経』の原本は唐代の半ば（八世紀半ば）に成立したものであるが、すぐには刊行されず、かなり長い間、写本の形で伝わったはずである。それが南宋に至って、『百川学海』という叢書に入れられて刊行され、後世の諸本の源流になったといわれている。古い文献のわりには、概してテキストの異同は少なく、あったとしても、細部の文字のレベルにとどまっている。しかしたとえ、『茶経』四之器の「盃」の項に、「越州瓷岳瓷皆青。青則益茶。茶作白紅之色。」（越州瓷・岳瓷は皆青し。青ければ則ち茶に益す。茶は白紅の色を作す。）（傍線を施したのは、問題の文字。以下も同じ。）のようなケースは、このままでは全く理解ができず、何らかの訂誤を試みないといけない。この場合は諸本すべて「白紅」に作っており、この誤りが『百川学海』以来のものであることをうかがわせるが、一方で「白紅」が「緑」の誤りであることは明らかである。上文に「越瓷青而茶色緑」とあることから、越瓷などの青磁の盃の中では茶の色が映えて緑色に見える、という意味でなければならぬからであり、古く大典禪師が『茶経詳説』の中で「疑は緑ノ字ナラシ」と述べたのも当然であろう。

では、なぜ「緑（緑）」が「白紅」に誤られたのであろうか。それは、「緑」を草書で書いた場合、右上が「白」に似ることがあり（図1）、大きめに書かれた「緑」が、「白」と「紅」の二字に分解されて誤読され、書き写されて定着したのであろう。その際、下文に「刑州瓷白。茶色紅。」（刑州瓷は白く、茶色は紅たり。）とあるのに影響されたという事情もありえよう。

このように、『茶経』の文字の異同を考える場合、草書の形や、異体字を考慮することで、はじめて理解できることがある。上に述べたように、『茶経』が写本で伝えられた長い時期が存することもその一因であろう。

次に、参考までに、その種の異同例を補っておきたい。なお、『茶経』本文は頁数ともに、布目潮瀨氏の近著『茶経詳解』（淡交社）により、【異同】の内容も、同書の記述に添うものである。【補説】は、筆者の補った意見である。

「栴檀蒲葵之屬」一之源（13頁）

【異同】底本（『宮内庁書陵部蔵旧刊百川学海本』）

は「藏」に作り、明本以下多く「蒲」に作る。

【補説】「蒲葵」は「柃櫚」に似た植物であり、「藏葵」はありえない。草書の類似により(図2参照)。「蒲」を「藏」に誤ったものであろう。

「峡中以一百二十斤爲上穿。八十斤爲中穿。五十斤爲下穿。」(二之具(58頁))

【異同】諸本は「斤」に作るが、『明鄭燠本日本天保十五年刻本』の頭注に「斤は片に作る」(斤作片)とある。

【補説】文意から推して「片」(餅茶を数える単位)が正しい。それぞれの異体字が酷似しているため(図3参照)、また、上文に「斤が多く用いられているため、「片」を「斤」に誤ったものであろう。

【京錐文也】三之造(69頁)

【異同】底本は「錐」に作り、明本以下多く「錐」に作る。

【補説】「京錐」の語意は未詳であるが、「錐」が誤りなことは明らかである。草書の類似により(図4参照)。

【紐翠袖以綴之】四之器(108頁)

【異同】底本は「紐」に作り、明本以下多く「細」に作る。布目氏は「細」は「紐」の誤読とする。

【補説】文意から推せば「紐」の方がよい。草書の類似により(図6参照)。「紐」を「細」に誤ったものであろう。

【處五升】四之器(126頁)

【異同】諸本は「處」に作るが、『明鈔說鄂本』は「受」に作る。

【補説】上文の「水方」に「受八升」とあり、「滌方」に「受八升」とあることから推せば、「受」が正しいと思われる。草書の類似により(図7参照)。「受」を「處」に誤ったものであろう。

【欽音使】五之煮(152頁)

【異同】底本は「使」に作るが、『重較說鄂本』他諸本は「備」に作る。

【補説】字音から考えれば「使」が正しい。草書の類似により(図8参照)。「使」を「備」に誤ったものであろう。(図の文字は『広碑別字』、『草書の字典』、『中国書法大字典』による。)

照)、「錐」を「錐」に誤ったものであろう。

【頭系一小鋸】四之器(87頁)

【異同】諸本等しく「鋸」に作るが、布目氏は「鋸」に灯火の油を入れる浅い盆の意があることを述べられた上で、「鋸は、鋸・環と同義と見

【補説】「鋸」は僻字であり、炭櫛(炭割り)のような道具の先端の裝飾としては、輪飾りととれる「鋸」の方がふさわしい。草書の類似により(図5参照)。「鋸」を「鋸」に誤ったものであろう。

緑

図1

鋸

図4

受

図7

蒲

図2

錐

図5

使

図8

斤斤

図3

細細

図6

第十五回研究会

第十五回研究会を、九月一日京都市上京区の相国寺で開催した。倉澤行洋会長の挨拶の後、日向 進理事の司会で会は進められた。報告と講演の概要は次の通りである。

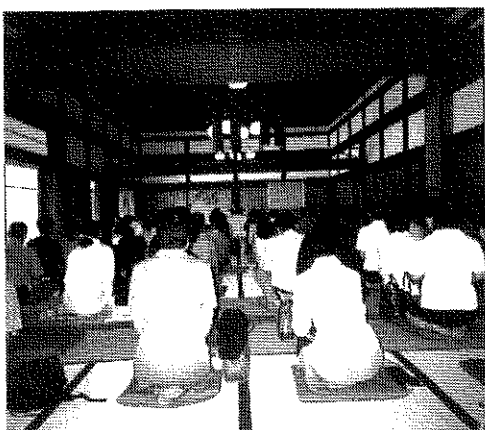
同朋衆再考―茶の湯研究における位置付けをめぐって―

家塚智子

同朋衆の中には、「会所の同朋衆」と「御連れの同朋衆」がいる。特に後者は特権的な役割を務めた。その職掌は、室町幕府行事の儀礼化、故美化に伴って幕府組織に組み込まれていった。將軍あるいは室町幕府という権力機構に依存していた存在で、権力とは不可分なものであった。これまでは特に同朋衆の文化面での役割に焦点が当てられ、能阿弥、相阿弥、芸阿弥等が注目され、彼らの評価が高いために同朋衆の評価も高かったが、同朋衆全体の評価は検討し直す必要がある。

では、その同朋衆が茶の湯の歴史の中でどのように語られ評価されてきたのか。冒頭に茶の湯の歴史の記述を持つ『山上宗二記』(今

津本)には足利義政が能阿彌の紹介で村田珠光に茶の湯を学んだことが出てくるが、これは『宗二記』成立の十六世紀後半の茶の湯の歴史観を示している。また、『千利休伝記』には利休の先祖は將軍家に任えていた同朋衆であり、祖父は義政に仕えた千阿彌であると記されている。それが事実ではないにしてもそれ以降そういう認識が受け継がれてきたということが重要である。また元禄時代に成立の『南方録』には、利休は相阿彌の表具の法を受け継いでいるとされる。近世の利休神聖化の流れの中で、同朋衆が引き合いに出される緒づけられたといえる。しかし、なぜ義政



に茶の湯の源流が求められたのか。なぜ同朋衆なのかを考える必要がある。

足利義教の時代にお成りが繰り返され、次第に儀式がかたまり、座敷飾りについて著されるようになった。『君台観左右張記』は、能阿彌の時代にはその故実的な性格の強い手控的なものであったのが、相阿彌の時代に徐々に伝書的な性格を、そして目利きの性格を帯びるようになった。その能阿彌から相阿彌へ伝授されたものが、武家儀礼として受け継がれたためではないか。また室町幕府内での身分的序列は義政時代に定着したと考えられるが、これが後の武家政治の中に受け継がれていった。この政治的な義政の権威と、東山御物が義政のものであったというイメージが結びついたことで、茶の湯の起源を義政やその近くにあった能阿彌に結びつけることになったのではないか。茶の湯の中で語られた同朋衆像は作られたものであるが、その前提の上で今後の研究を進めたい。

(講演)
禪の山河

有馬頼底

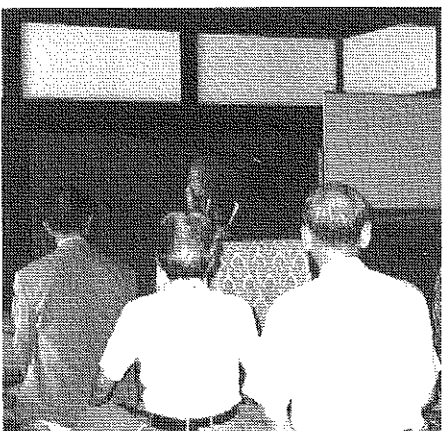
先の大戦での中国での父の戦争行為に対す

る贖罪の意味も含めて、一九七七年から中国巡礼の旅を続けている。

河北省石家荘の田圃の中の臨濟禪師縁の長齡塔に茶を献じたことがあるが、この人のおかげで今日があるといった感動は言いしれぬものがあつた。

広州では、六祖慧能禪師に茶を献じたが、禪師は学問は学んではいないが、米を撞くという行為が悟りに繋がることを身を以て実践した方である。

雲門禪師は、人間のぎりぎりの生き方を教えられた方で、広東省の雲門山にこもっておられた。ここは実に素晴らしい場所で、農作物をつくり修業をするのに上々の場所でもあ



(七月二十八日)
川柳に茶の湯を見る(二)

村上瑛二郎

昨年、江戸川柳の中で茶の湯の故事・逸話を詠じた句、百五十を紹介したが、今回は引き続き、茶の湯一般に関した句を紹介した。膨大な川柳の中で茶の湯関連の句は0.2%程ではないが、それでも題材は公家・大名・町人・女性の茶の湯や、軸・茶碗・釜といった茶道具、露地・数寄屋や菓子・茶銘などまで多岐にわたり、当時の一般人の茶への関心や知識、嗜好が窺われる。

江戸の庶民階級は経済的發展と共にゆとりを持ち、遊山・芸能・読書などに親しむようになり、文化文政時代には享樂的傾向は一層強まり、その娯樂の一つとして茶の湯もあつた。ことに中産階級の隠居後の風流な楽しみとして俳諧と並び称された。それは「四季共に茶は隔てなき閑の友」という前提はあつたが、川柳では、松平不昧が「贅言」で指摘したのと同じ視点で、じじむさく、変つた古い汚い物を好み、やたら頭を下げて亭主のする事を軽薄に誉め、高慢くさく肩肘張っているという、茶人の欠点を鋭く諷した句が多い。「道楽の理に落ちたのが茶人なり」「茶座敷

と湯屋は道具の誉めどころ」「茶湯者の好きを女中は汚がり」「茶の席に只のあたまは下手らしい」「不器量が早く目に付く茶の道具」などから当時の弊習が察しられる。一方、「古井戸に茶人たまらずはまり込み」「真鍮の襟巻茶釜粹に見へ」「臼の後家茶人の庭の縁につき」「飛び石は鞍馬茶の湯は大天狗」などの句から、井戸茶碗の人気、水屋鑑の創始、露地の石臼の飛び石や鞍馬石の流行が感じられ、「水指を蹴鞠の見得で公家衆の茶」「大名の世の捨てどころ四畳半」「やつて見る夫に習つた茶の点前」「別荘に釜日を聞きに船橋屋(当時の有名菓子商)」「花魁に内証でさせる茶の稽古」などの句から、当時の茶の湯の種々相をかいま見ることが出来る。茶の湯史上では兎角マイナー視される江戸末期ではあるが、茶の湯参加人口の最も多かった時代の一つとして、川柳もその検証に役立つのではないか。

上総国久留里藩と『土屋家蔵帳』

小倉光夫

房総の千葉氏が後退し安房に里見氏が、上総には武田左馬助信長が入国して真里谷氏七代として百三十数年間続いた。家康の時代に

る。この時から自給自足が始まり、作務を重視し、それを通して自分が高まることを求めることになった。

また、喫茶去で知られる趙州禪師の師である南泉禪師の旧跡にも行き、草ぼうぼうの所をかき分け、卵塔に茶を献じてきた。この禪師は、斬猫の話や、死後はどこに行くのかという弟子の問いに対し、東下の驢となり西下の馬となると答えたことで知られる。どう生まれどう死ぬかということは問題ではない、どこに行くのかも知ったことではないという、死に直面したすごい答えである。

このようにこれまで方々を巡礼をしてきたが、今後もこの巡礼を続け、先々で茶を献じるのが自分に課せられた仕事と考えている。

例会

東京例会

七月二十八日(土) および九月二十二日(土)のそれぞれ午後一時から、東京芸術大学において東京例会を開催した。発表の要旨は次の通り(なお九月二十二日の秋枝ユミ氏の発表については来号掲載予定)。

入り上総武田の縁の久留里城に甲斐の名族土屋忠直が入国した。土屋氏の祖は平氏で中村宗平の三男宗遠が相模国土屋を領し土屋を名乗り、宗遠から十二代目の氏遠は平氏でありながら甲斐源氏の武田氏の家臣となった。土屋忠直と神尾元勝は異父兄弟で、元勝と元直の父が岡田竹右衛門元次で阿茶局の養子となり、阿茶局は忠直の義弟元勝をも養子とし自分の實子神尾刑部少輔守世の弟として神尾家に登庸した。元勝の長女が小堀遠州の甥九郎兵衛正十の室として小堀家に入り、阿茶局の神尾家と小堀家との姻戚関係が成立した。

上総土屋氏の風雅の流れは三代で滅び、分知された土浦藩土屋家の藩主数直・政直は共に幕閣老中を務めた関東有数の大名茶人である。「土屋蔵帳」がある。幕閣要人と言うことだけで多数の中興名物が蒐集出来たのであろうか。

数ある「土屋蔵帳」と云われる物のうちで、巻末に「右之品々寛政年中土屋相州公御拂物 寛政十戊年弥生日」と書かれている酒井家文庫所蔵の『土屋侯所蔵名器目録』が着目される。その蔵帳の成立時期の背景には、天明五年(一七八五)に本家小堀政方の家政

が乱れ答を糺され、これによって小堀各家も寛政初期には官役を辞した、ということがある。遠州の茶入を中心とする「茶道具」と「名物記」などは一族の各家を取巻く姻戚関係の風雅の大家などを中心に伝承された時期なのではなからうか。

土屋一族が茶の湯に深い係わりをもったのは近習出頭人の栄進であり、それに加えて神尾・小堀家との姻戚関係の中で形成されて行った閨閥の系譜からなのではなからうか。

茶の湯文化を持つ土屋氏の上総での活躍は短かったが分家の土浦の土屋家に継承されて、遠州の「茶の湯」は、さらに大給松平和泉守乗邑との姻戚関係へ繋り『三冊名物記』を経て酒井宗雅から松平不味にまで繋がって行く。

茶の湯の伝承はあくまで家によるもので、人の繋がりの中に伝えられて行くものである。

(九月二十二日)

数寄者の茶室とその源流

桐浴邦夫

本発表は、明治維新から暫く続く冬の時代と認識されている期間における茶室に焦点を

供う」という嵯峨天皇の詩句が見え、最澄と茶との関係が窺われる。

さてこの大会は中国人大、政治協会、中華全国工商聯合協会、対外貿易省、茶葉流通協会、茶学会、国際茶文化研究会、華僑茶葉基金、農科院茶葉研究所、浙江省政治協会、農業庁と上虞市政府の支援の下で行われたものである。

成立大会は以上の方面からの祝電、祝辞の紹介で始まった。つづいて、上虞市市長が上虞市政府と七十七万八千の上虞市市民を代表して、来賓たちへの歓迎の辞と大会への祝辞を述べた。次に、浙江省政協主席、国際茶文化研究会会長劉楓氏、華僑茶葉基金理事吳甲選氏、元中国農科院茶葉研究所所長陳宗懋氏、上海茶業学会秘書長劉啓貴氏などの発言があり、元農業部農業局副局長高麟溢氏が「吳覺農茶学思想研究会」の成立過程について報告した。

会議の合間には、お茶の郷でもある上虞で産した「覺農舜毫」と名づけた名茶が「第二回国際名茶品評」の金賞を取ったことを表彰したり、参会者全員の写真を撮影したりして、休憩を取った。

あてたものである。江戸期において大名屋敷や寺院に設けられていた茶室は、維新後のそれらの没落に伴い、多くが取り壊しあるいは売却される運命にあった。また一方、明治の後半からは数寄者たちの活躍が見られ、茶室建築は新たな展開を迎える。この両者の間を埋めるものとして、ここでは移築された茶室、そして博覧会や博物館における茶室の存在に注目し、それらを後に隆盛を迎える数寄者の茶室の源流としての文脈の中で捉えようと試みたものである。

まず数寄者たちの中でも比較的早い時期に活躍した井上馨、高橋帯庵、原三溪についてとりあげる。井上馨は東大寺四聖坊にあった茶室八窓庵を東京鳥居坂の本邸に移築し、それは天皇の行幸を迎えての席開きとなった。高橋帯庵は新築の自邸に寸松庵を移築した。また原三溪は臨春閣等を移築し、三溪園を公開する。これらに共通するのは、それぞれ移築された茶室であった、ということである。

興福寺の茶室六窓庵は東京国立博物館が購入し、第一回内国勸業博覧会開催時に移築が完了することになった。同じ頃、堺の南宗寺でも博覧会が開催され、大黒庵で茶会が開かれたほか、実相庵が移築された。また愛知県

会議再開後は以下の事項を審議した。まず、「吳覺農茶学思想研究会」の章程(規約)草案、会長・常務副会長・副会長・秘書長・理事・常務理事・名誉顧問・顧問・名誉理事の選出の提案があり、挙手による採決で原案どおり決った。名誉理事に選ばれたのは主に日本、アメリカ、フランスと台湾の代表で、日本からは、山西貞氏、倉澤行洋氏、小泊重洋氏の名が挙がった。

筆者は「日本茶の湯文化学会」会長・倉澤行洋先生からの委託を受け、中国における「吳覺農茶学思想研究会」成立に対しての祝辞を述べた。参会者一同は大きな拍手をもって倉澤先生への感謝の意を表した。

午後二時三十分より「吳覺農茶学思想研究会」第一回学術研究会へ移り、十二名の発表者が各々論文を発表し、著者も日本からの立場で「日本における吳覺農先生、『茶経述評』と中国茶」と題した論文を発表した。この研究会の編集部が、大会の前には「吳覺農茶学思想研究会記念文集」を発行し、大会の後には「吳覺農茶学思想研究会第一回学術論文集」を発行する予定になっている。

夜七時三十分から、「吳覺農茶学思想研究会」の位置づけ、研究方向と研究会の運営に

博覧会において猿面茶室が、奈良国立博物館には興福寺大乗院の八窓庵が移築された。ここで注目されることは、江戸期においては一般的に私的で奥向きに位置していた茶室が、明治期には公の場所に設置されるようになったということ、また六窓庵の移築で奔走した博物館の町田久成は、近代の数寄者の先駆けとも言える活躍をしたと捉えられることである。

このように見てくると、江戸から明治への展開の中で災いを被った茶室の一部は、しかしながら公の場所に移築されることによって、新たな光彩を放つことになった。それは後の数寄者たちの活躍にも、少なからぬ影響を与えたと考えられるものである。



中国上虞「吳覺農茶学思想研究会」

設立大会に出席して(承前)

顧雲

最澄が唐から持って帰った茶の種を植えた「日吉茶園」(いま近江坂本)は、日本最古の茶園となる。「文華秀麗集」にも「羽客(最澄の)講席に親しび、山精茶杯を(最澄に)

ついて、代表たちがさらに次の二つの事項すなわち①「吳覺農茶学思想」の定義について、②二十一世紀における「吳覺農茶学思想」の意義について、論議を重ねた。

五月二十三日、この大会二日目の朝、参会者一同は龍山にある「吳覺農先生の墓」へ参り、各代表たちが墓前に献花を行い、三拝の礼を捧げた。見まわすと、曹娥江が龍山の麓に婉曲な流れを見せ、龍山と相對する舜山の姿もくっきり見えて、実に美しい景色であった。参会者は吳先生と関わりのある人たちが多く、その三分の二ぐらいは七十歳を超えた長老たちが占めていたので、この大会は、中国における茶文化の研究会の中で、平均年齢が一番高いだろうと思われた。この大会は、「吳覺農茶学思想」を若手研究者に継承してもらおうよい機会でもあった。

日本と中国の間の文化交流の淵源は深く、長い。さらに、未来へ向け、真の友好的な交流への道を歩み出している。お互いに学び合い、過去の歴史と現在への思考を重ねながら、両地でそれぞれに特性のある、かつ普遍性をもつ素晴らしい東方文化の精華が洗練されていくことであろう。

例会のご案内

近畿例会

次のとおり開催します。新年を迎えた忙しい時期ですが、ふるってご参加ください。

日時 一月十九日(土) 午後二時
会場 池坊短期大学 第一会議室
シンポジウム 「日本における

抹茶文化と煎茶文化」

発題 小西 茂毅
小川 後楽
谷 晃

近畿例会々場 (池坊短期大学)

池坊学園
室町通正門よりお入りください。

最寄り駅 地下鉄/四条駅/ 阪急/烏丸駅(地上出口26番)
市バス/烏丸四条

池坊短期大学・池坊文化学院

〒660-8491 京都市下京区四条室町鶴崎町 ☎0120-87-3852

後記

*三十一号をお届けします。発行が予定より少し遅くなりましたが、十二月中に発行できてほっとしております。

*本年度の大会は十一月十八日東京で開催しました。参加者も多く盛会裏に終わりました。今年は珠光没後五百年ということで、珠光に因む発表とシンポジウムを行いました。内容が盛りだくさんであったために時間が足りなくなりましたが、充実した大会だったように思います。次号で詳しくご報告します。

*本年度の事業の内、残すのは近畿例会と研究会だけになりました。研究会は三月に佐賀県の名護屋城博物館で開催する予定ですので、ご予定に組み入れていただければ幸いです。

*今年度から、谷、中村、影山、日向の各理事が、それぞれ会務担当、会誌担当、会報担当、大会研究会担当の代表をつとめ、戸田、小泊、高橋の各副会長は、それぞれ会員増加、総合研究、対外交流を担当されることになりました。ご協力をお願いいたします。

*例会のお知らせは、会報によることになっており、特別な場合を除いてあらためてのご案内はいたしません。ご注意ください。

役員および幹事氏名(五十音順)

- | | |
|-----|---|
| 会長 | 倉澤行洋 |
| 副会長 | 小泊重洋 高橋忠彦 戸田勝久 |
| 参与 | 中村昌生 林屋晴三 村井康彦 |
| 理事 | 赤沼多佳 尼崎博正 影山純夫
金澤 弘 熊倉功夫 小西茂毅
高橋康夫 竹内順一 田中秀隆
谷 晃 谷端昭夫 筒井紘一
徳川義宣 中村利息 名児耶明
西 和夫 橋本 実 日向 進
H・S・ヘンネマン 堀 信夫
堀内国彦 三崎義泉 美濃部仁
監事 赤井達郎 井尻益郎 |
| 幹事 | 飯島照仁 池田俊彦 岩崎正弥
原田茂弘 船阪富美子
山田哲也 |